

放課後等デイサービスで勤務する職員の ソーシャルスキルトレーニング（SST）の認識に関する研究

福祉心理学専攻 井熊 朗

要旨

I. 目的

放課後等デイサービスは6歳から18歳までの学齢期の障がいのある生徒を対象に、放課後や夏休み等の長期休業日に生活能力向上のための訓練および社会との交流促進等を継続的に提供し、障がいのある生徒の自立を促進するとともに、放課後等の居場所作りを推進する制度である。対象となる子どもは、必ずしも療育手帳や身体障害者手帳等を保持している必要はなく、設立要件も幅が広いこともあり、利用価値の高いサービスとして全国的に広がりを見せている。療育の内容や方法については大きな縛りがなく、学習支援、余暇活動、SST など多岐にわたっている。一方、発達支援が十分に実施されておらず、活動内容に偏りが見られる事例や個別支援計画の達成目標が具体的ではなく、目標達成のための支援手続きが不明瞭である事例の存在など課題も指摘されている。加えて、2024年度に実施された放課後等デイサービスを含む児童発達支援事業に関する法改正により、より専門性の高い支援を提供することが求められている。

本研究では、以上の現状を背景として、社会性・対人コミュニケーションスキルを身に付ける支援の方法の1つであるソーシャルスキルトレーニング（SST）に着目し、放課後等デイサービスで勤務する職員のソーシャルスキルトレーニングの認識に関して研究を行った。具体的には、放課後等デイサービスで勤務している職員がSSTに対してどのようなイメージを持っているのか、さらに実施の方法とその際の困難さについて明らかにし、放課後等デイサービスでのSST実施に関する現状と課題について考察することを目的とした。

II. 方法

1. 調査期間 令和6年9月

2. 対象

新潟市内にある放課後等デイサービスの事業所で1か所の施設で働く職員4名。職員構成は施設管理者、児童発達管理責任者、社会福祉士、保育士となり、ソーシャルスキルトレーニングの経験は職員一人ひとり異なっていた。

3. インタビュー調査の実施方法

研究協力者に対して、アンケート用紙を作成して4人の職員に直接内容を聞き取る半構造化面接でインタビュー調査を行った。面接は当該事業所で行った。研究協力者にとって過度の負担とならないこと、安心してインタビューに参加できるようにすること、研究協力者のプライバシーと個人情報の保護に留意することを条件にインタビュー調査を開始した。また、職員に許可を得て必要に応じてボイスレコーダーに内容を録音した。

4. インタビュー調査の内容

インタビュー調査の内容について以下の項目について尋ねた。

① SST に関するイメージについて

- ・ SST についてどのように感じているか、どのようなイメージを持っているか？
- ・ より効果的な SST を放課後等デイサービスで行う際に必要になること

② SST の実施について

- ・ どんな手法で、何名で実施しているか
- ・ 活動目標や内容の決定に際し利用者に対してどのようなアセスメントを行っているか
- ・ SST を実施後はどういった評価をしているのか？
- ・ SST を実施する際に、困難に感じていること

Ⅲ. 結果と考察

調査の結果、放課後等デイサービスで勤務する職員は SST の実施に関して、児童とのコミュニケーションや言葉の伝え方において工夫が試みられている一方、困難さを感じていることが明らかとなった。ADHD と ASD の特性の共通点にコミュニケーションの困難があり、SST を行うにあたっては言葉だけでなくプロンプト（絵カード）も用いて実施するが、実際、児童一人ひとりの特性と強さは異なるため対応が困難となることが考えられる。

また、「SST を実施する際に、困難に感じていること」として、「職員側は児童に身に付けてもらいたいこと、練習してもらいたいことはあるが、職員目線の進行になりやすい。児童が主体的に参加できるようにするためには？」など、児童の SST への主体的参加を促す際の困難さに関する回答が見られた。SST における学習内容の日常生活における般化を考えたとき、児童の主体的な参加が重要になると考えられるため、その方法について今後整理、検討が必要であると考えられる。